

『一高寮歌解説書の落穂拾い』(その一〇五)

詠帰会 森下達朗(一高同窓会会友)

『全寮寮歌』(明34／大島正徳 作詞、島崎赤太郎 作曲)の原曲について

【はじめに】

過日(10月26日)の一高秋の寮歌祭の折にヘルマン・ゴチエフスキ東大大学院教授(音楽学)から、当初に一高『校友会雑誌』に掲載された「全寮寮歌」の曲は、現行の楽譜とは全く異なるものであった、との意外なお話を伺った。初めて知る事柄なので、さっそく東大駒場図書館で『校友会雑誌』第105号(明治34年3月)を閲覧し、教授のご指摘どおりであることが確認できた。そこで「全寮寮歌」の原曲が変更された経緯などについて調べた結果を報告する。なお本寮歌の歌詞の解釈については、拙著『一高寮歌解説書の落穂拾い』(増補新版、平成27年)ですでにとりあげているので、ここでは触れない。

●「全寮寮歌」成立の経緯

明治33年中に、それまで構外隣接地に借用していた南・北寮を構内に新築、合わせて中寮を新築して東・西・南・北・中の五寮が成り、同34年1月から全寮制(皆寄宿制)が実現したのを機に「全寮寮歌」(大島正徳作詞、島崎赤太郎作曲)が作られ、同34年3月1日開催の第11回記念祭で発表された。『向陵誌』には「三十四年春三月一日第十一回の記念祭を催す。……寮生の意氣彌上に盛んにして、初めて歌はれし全寮々歌の譜も懐しく、實に自治は『闇の中なる一筋の光なりけり』とある。

本寮歌の歌詞には寄宿寮制度の意義、自治共同の精神、並びに明治23年の寄宿寮開設時に木下校長が示した「四綱領」の趣旨が端的に盛り込まれている。また本寮歌の曲について、『一高寮歌私観』(井上司朗(一高大13文芸))は「真に全寮寮歌たる貴祿を堂々と示している」とし、『一高寄宿寮寮歌解説』(一高同窓会)もまた、「内容にふさわしい荘重かつ品格の高い調べを奏でている」として高い評価を与えている。なお、主に大正14年版の寮歌集において、譜に10箇所ほどの変更が加えられた(吉田健彦氏のサイト参照)。

いつの頃からか、正式な寮の行事の際には冒頭に「全寮寮歌」、そして終わりに「嗚呼玉杯」を歌うのがしきたりとなった。一高玉杯会主催の春秋の寮歌祭にもこの伝統は受け継がれている。

●一高『校友会雑誌』に掲載された「全寮寮歌」

明治期の一高寮歌については、『校友会雑誌』の各年の3月発行の号に掲載されている。明治34年3月発行の『校友会雑誌』第105号においては、第11回寄宿寮記念祭の記事を「既にして新に成れる全寮々歌は奏せられ、各寮々歌は順次に歌はる」と締め括ったあとに、全寮寮歌及び東・西・南・北・中の5寮の寮歌の歌詞が掲載され、このうち全寮寮歌のみ数字譜の楽譜が付されている。この数字譜、および同譜(ミスプリント訂正後)を五線譜化した楽譜を、ゴチエフスキ教授のご好意により3頁に掲載したのでご参照願いたい。この数字譜が現行曲譜の原曲とされている初版寮歌集(明治37年6月)掲載の楽譜(4頁参照)とは全く異なっていることが確認できたことから、その経緯について手を尽くして調べてみたところ、『一高同窓会会報』第24号(昭和9年1月)に掲載された、全寮寮歌の作詞及び作曲に関連した寄稿文が見つかった。これは、昭和10年に予定された寮歌集の抜本的改版の一環として、同窓会及び生徒委員が大々的に取り組んだ「寮歌作詞者作曲家調査」に対するレスポンスとして「同窓会会報」に寄稿されたものである。

●『一高同窓会会報』第24号（昭和9年1月）への寄稿文

▼『全寮々歌の歌詞』大島正徳（明34文科、東大文学部講師、一高講師）

「御恥しい次第だが、その前の寮歌があまりに歌讀みの歌だと云ふ非難があり文科の者が作れと云ふ相談一決し小生の室の者（三年生）が作らねばならぬ破目となり、しかも誰も作り手がなく小生が委員であるので押しつけられ已むなく變なものを作り其を杉先生菊地先生が御直しになり、遂に寮歌となったらしいのです。らしいと云ふのは小生卒業後譜なども出来たと考へます。自分で寮生として唱った覚えなし。」

【森下注】大島正徳氏は明治34年7月卒業で、もとより3月1日の記念祭当日は在学中であり、しかも寮生総代として祝辭を朗讀している。「遂に寮歌となつたらしい」とか「譜などは卒業後に出来た」とか、「自分で寮生として唱った覚えなし」などというのは單なる照れ隠しの表現であろう。

▼『全寮々歌の曲』石倉小三郎（明34文科、高知高等学校長）

「該曲は昨年物故されし故東京音楽学校教授島崎赤太郎氏の作に係り當時の谷山生徒監が上野へ行かれ依頼されたことを記憶して居ります。當時は生徒間で作曲などいふ迄に進み居らず（其以前に榊保三郎博士の名作曲もありましたが）又専門家の間でも作曲はあまり振はず、丁度中學唱歌集が始めて出た頃で當時の天才的音楽家滝廉太郎氏の荒城の月、箱根八里等が出て此方面に一時期を劃した頃であります。當時一高の音楽部はさる事情から消滅し利益の餘として樂友会なるものがあり、島崎氏の指導を受けて居たのであります。同氏に多忙又謝禮も出せぬ様な有様で充分の練習も出来ず、甚だ振はなかつたのです。島崎氏も始めに作られた曲が少々上品すぎ六ヶ敷いといふので又別に改作して貰つたり可成り手数を經たものです。今傳つて居るのは後者の方です。前者の方も自分はメロディーだけは暗唱しています。島崎氏自筆の譜もある筈で（震災に焼けなければ）今となつてはこれも歴史的遺物です。（後略）」

【森下注】石倉小三郎氏の一高卒業は明治34年7月、一方島崎赤太郎氏は同35年3月に留学のためドイツに渡航したこと等を勘案すると、「全寮寮歌」の原曲が島崎氏によって改作されたタイミンングは、原曲が発表された明治34年3月1日から数か月以内くらいのことと考えられる。そして改作された方の数字譜が初版の寮歌集『校友会雑誌』第138号号外、明治37年6月発行）に掲載されたものと推定される。

◎石倉小三郎（明治34年一高文科卒。一高では音楽部。東大独文科卒。明治36年には、日本初演のグルックのオペラ『オルフォイス』（一高水泳部部歌「狭霧はれゆく」の原曲とされる）の訳詞を乙骨三郎、近藤朔風と協力して完成させた。のちに高知高校、大阪高校の校長を務めた。音楽評論家。ロベルト・シューマンの『流浪の民』の訳詞で知られる。

◎島崎赤太郎（明治26年東京音楽学校専修部卒業。母校の助教となり、明治35年から39年までドイツのライプツィヒ王立音楽院に留学。留学中に東京音楽学校教授となる。音楽教育者。オルガン奏者。文部省唱歌編纂委員を務め尋常小学唱歌などの選曲にも尽力した。

●「全寮寮歌」の原曲に対するゴチエフスキ教授の所見（筆者あてのメールから）
「今の旋律よりもこの原譜の方が立派な作品だと思います。ただリズムが西洋的で、メロディーに半音が入っているなど、当時の寮生には歌いにくかつただろうと思います。（また、単旋律で歌うと和声進行が分かりにくいので、伴奏で和声を付けながら歌つた方が分かりやすいと思います。）」

以上

②（令和元年十一月十一日）

③

全寮々歌

校友会雑誌第 105 号 (明治 34 年 3 月) 所載

ホ 調 4/4

5 | 3.3 2 1 7 1 | 2-0 2 | 4.4 3 2 | 3-0 5 | 3.3 2 1 7 2 |
 ヤ ミノナカナル ヒ トスヂー ノ ヒカリナリケ-

1-0 1 | 2 2 3[#] 4 | 5-0 5 | 6.2 2 3 4 | 5-0 5 | 5.6 5[#] 4 |
 リ ア マーツ ヒ ノ ム カフガオカ ニ キリ-ハレ

5-0 5 | 6.2 2 3 4 | 5-0 5 | 5 6 3[#] 4 | 5-0 5 | 1.2 3 4 5 6 |
 テ ハ ナヤギワタル アサーノイ ロ ココロザシ-

5-0 5 | 1.7 6[#] 5 | 6-0 4 | 4.3 2 3 1 | 1-0 1 | 1 2 6.7 |
 ル セイ-子ン ガ ニゴリユクヨ チ ナゲ-キツ

1-0 5 | 3.3 2 1 7 1 | 2-0 2 | 4.4 3 2 | 3-0 3 | 3.2 1 2 3 4 |
 ツ ミ サチタテ-シ カ シワギー ノ ハ ヨ-カゼカラ-

5-0 5 | 5-6.7 | 1̇-0 ||
 ル キ シクリヨ -

全寮々歌

明治34年の校友会雑誌による旋律

五線譜化、ミスプリントの訂正：Hermann Gottschewski
(原譜は数字譜)

ヤ ミ ノナカナル ヒ トスヂー ノ ヒ

5 カ リナリケ-リ ア マーツ ヒ ノ ム

9 カ フガ オカ ニ キリ-ハレ テ ハ

13 ナ ヤギ ワタル アサーノイ ロ コ

17 コ ロザシ-アール セイ-ネン ガ ニ

21 ゴ リユ クヨ ラ ナゲ-キツ ツ ミ

25 サ フトタテ-シ カ シワギー ノ ハ

29 タ -カゼカヲ ル キ シ クリヨ -

全寮々歌

初版寮歌集【校友会雑誌第138号号外(明治37年6月)】所載

ニ調 4/4

3 3 3 4 3 2 1	5 5 5 6 5 0	3 5 5 6 5 4 3
ヤミノナカナル	ヒトスツノ	ヒカリナリケリ
2 2 2 3 2 0	5 5 3 1 2 3 2	5 5 6 1 2 0
アマツヒノ	ムカウガネカニ	キリハレテ
1 1 2 6 5 5 3	4 3 2 5 1 0	5 5 5 5 5 5 5
ハナヤギヨナル	アサノイロ	ココロザシアル
6 6 6 6 6 0	5 5 3 1 2 3 2 1	5 5 6 7 1 0
セイヤネノカ	ニゴリユクコナ	ナゲキツ
2 2 3 5 3 3 2	5 3 3 2 2 0	1 1 2 6 5 5 3
ミサナトカタシ	カシハヤノ	ハタカセカホル
3 3 5 5 1 0		
A シクリヨ		

全寮寮歌

大島正徳 作詞
島崎赤太郎 作曲

やーみのなかなるひとすじの
 ひーかりなりけりあまつひのむこーがおかに
 きりはれてはなやぎわたるあさのいろ
 こころざしあるせいねんがにーごりゆよを
 なげきつつみさおとたてしかしわぎの
 はたかぜかおるきしくりょう

- 一、 闇の中なる一寸ぢの
向ヶ岡に霧はれて
志ある青年が
操と樹てし柏木の
 - 二、 高き賤しきおしなべて
塵にも似たる輕薄は
されば禍多くして
我は迷はじ一寸ぢに
 - 三、 濁れる波を支へんに
狂へる風を拒がんに
自ら治むる精神の
山なす濤もうち砕く
 - 四、 かばかり熱き真心の
自ら治むる心根の
幾世の春はめぐるとも
いかでか移りかはるべき
 - 五、 いざや吾伴この草の
あだ波風を拒ぎつゝ
頭にかざす柏木の
光を四方に傳へてむ
- 光なりけり天つ日の
花やぎ渡る朝の色
濁り行く世を嘆きつゝ
旗風かゝる寄宿寮
- 心は闇か濁江か
我が世を遂に如何にせん
世の人皆は迷ふとも
踏み行く道は四綱領
城も櫓もなければども
劍も楯もあらざれど
凝りかたまれる團結は
巖に似たる力あり
- 底より深く萌え出でし
草の根ざしの深ければ
幾世の風はすさぶとも
我が岡の邊の自治の華
根ざしにあつく培ひて
かをりを廣く匂はせて
ときはかきはに我寮の
譽を世々に傳へてむ